

19世紀ヨーロッパにおける美術解剖図譜の歴史

加藤 公太

順天堂大学医学部 解剖学・生体構造科学講座／東京藝術大学美術学部 美術解剖学研究室

医学の周辺領域としてヨーロッパで発展した美術解剖学は、19世紀末になって森鷗外と久米桂一郎によって日本へと輸入された。当時の美術解剖書は今なお使用され、美術解剖教育の礎となっている。日本における美術解剖学の前史である19世紀ヨーロッパの美術解剖書は約150冊にのぼり、時代区分は大まかに初期・中期・末期に分けられる。

19世紀初期の美術解剖書は18世紀の影響を色濃く受けたが、美術解剖学独自の表現が現れた。解剖図にはアルビヌス (Bernhard Siegfried Albinus, 1697-1770, 蘭) の『タブラエ』(1747) と、ウードン (Jean-Antoine Houdon, 1741-1828, 仏) によるエコルシェ彫刻 (1770) が度々引用され、前者はショシエ (François Chausseir, 1746-1828, 仏) 『手術, 医学, 絵画と彫刻を学ぶ若者向けの解剖図譜』(1823)、後者はカラドローリ (Francesco Carradori, 1747-1824, 伊) 『彫刻を学ぶ人のための基礎教育』(1802) などに引用された。美術解剖学独自の書籍として、サルベージ (Jean-Gilbert Salvage, 1770-1813, 仏) が『闘士の解剖図譜』(1812) を出版した。本書は古典彫刻の『ボルゲーゼの闘士像』(原作前100年頃, ルーヴル美術館蔵) をモデルにした解剖図譜で、当時の芸術表現が目指す理想的な人体像と解剖学を直接結びつける試みであった。これをきっかけとして、度々古典彫刻の解剖図が描かれた。

19世紀中期になると新しい人体観を加えた美術解剖書が現れた。フランスの解剖学者ガーディ (Pierre Nicolas Gerdy, 1797-1856, 仏) が初の美術用体表解剖学書である『画家や彫刻家, 外科医のための体表解剖学』(1829) を出版し、体表観察によって内部構造を把握する教育法を提案した。そのアシスタントを務めたファウ (Antonie Louis Julien Fau, 1811-1880, 仏) は、ガーディの書籍を踏襲し『画家と彫刻家のための人体解剖学アトラス』(1845) を出版した。体表に近い浅層筋に関する詳細な図を配した本書は、ポケットサイズ版や翻訳版など増刷を繰り返して、ヨーロッパ各地に普及した。ミュンヘン大学教授ハーレス (Emil Harless, 1820-1862, 独) は『学校機関と自己学習のための美術解剖学の教科書』(1856) で運動生理学を組み込み、20世紀初頭に続く美術用運動生理学の流れを作った。

19世紀末期になると、これまでの情報を編纂し、体系化させた書籍が現れる。シャルコー (Jean-Martin Charcot, 1825-1893, 仏) の元でアシスタントを務めたフランスの美術解剖学者リシェ (Paul Richer, 1849-1933, 仏) が『美術解剖学 人体の外形と解説』(1890) と『美術生理学 男性の運動について』(1892) を出版した。前者は近代美術解剖学の網羅的書籍で、久米によって日本に紹介され、現在でも東京藝術大学の美術解剖学の教材として使用されている。一方、森はバーゼル大学解剖学教授コールマン (Julius Kollmann, 1834-1918, 独) の『美術のための人体解剖学』(1886) を日本に紹介した。本書は今日では使用されないが、コールマンのアシスタントで『美術用人体解剖学』の解剖図を手がけたシーダー (Fritz Schider, 1846-1907, 独) の『美術解剖学ハンドアトラス』(1898) は現在でも人気がある。こちらのリプリント版は最大手ネットショッピングサイトで2013年度アート・デザイン部門 (洋書) の書籍売り上げ一位を記録した。

19世紀の美術解剖学の授業は現在と異なり、教壇の上で実際の解剖体を使用した講義が行われ、絵画や彫刻といった専攻科目の垣根を越えて人気を博した。こうした学問の需要と研鑽を経て出版された19世紀末の解剖図譜は、形態に対して高い完成度を持っていた。美術領域においては、描画技法がクラシカルな図であっても詳細な図版や正確な図版は淘汰されずに良い作品として残ることがある。こうした要素がリシェやシーダーなどの現代に通用する美術解剖書の背景にあると考えられる。